

公益財団法人国土地理協会 第17回学術研究助成

明治期における民間地図製作技術の継承と革新

—酒井捨彦をめぐる民間地図製作者とその地図に関する研究—

研究代表者	小野寺 淳	茨城大学教育学部
共同研究者	永井 博	茨城県立歴史館
共同研究者	河野 敬一	常磐大学人間科学部
共同研究者	増山 聖子	国立奈良工業高専
共同研究者	石井 智子	茨城県立鉾田一高
共同研究者	永山 未沙希	神戸市立博物館
共同研究者	塚本 麻文	

1. はじめに

明治政府はヨーロッパから近代測量技術を学ばせ、参謀本部による迅速測図や仮製地形図、海軍水路部による海図の作製を担った地図製作者を多く輩出した。たとえば「江戸湾実測図」を作成した小野友五郎（1817-1898）、関定孝の次男で初代陸地測量部長を務めた小菅智淵（1832-1888）、内務省地理局測量課長を務めた荒井郁之助（1836-1909）、工部省土木寮河川測量の小林一知（1835-1906）などがよく知られている¹⁾。

一方で、幕末から明治期にかけて活躍した民間の地図製作者もいた。「東西蝦夷山川地理取調図」で知られる松浦武四郎、石黒信由の後継者であった石黒信基（1836-1869）と北本栗（1832-1886）（射水市新湊博物館編，2011）、『石版伝習録』を執筆した岩橋教章（1835-1883）（楠善雄，1967・武田周一郎，2017 など）、銅板「大日本九州一覽之図」（1877年刊）を作成した森琴石（1843-1921）（熊田・伊藤，2009）、戦前の民間地図製作者の大家で『富山房最新日本地図』（1897年刊）などで知られる木崎盛政（1867-1945）、「尾三両国郡村名」（1876年刊）や「愛知県名古屋明細図」（1877年刊）を作成した山内六輔、「大日本管轄分地図」（1895年）を刊行した中村芳松（船杉力修，2017）などが比較的知られているであろう。江戸時代後期から「真景図」とも呼ばれる視覚的効果を重視した「絵図」も多くは民間地図製作者のよって作製され、湯治や社寺参詣のような観光利用のみならず、明治期にはこれらの「絵図」は公文書に準ずる付図として使用されることもあった（国立公文書館，1996）。たとえば、目賀田帯刀（1807-1882）は、安政期に幕府の命を受け蝦夷地の地図調査を行い北海道・樺太の沿岸を描いたが、後に『北海道歴検図』として開拓史に納入した（山田志乃布，2008）。こうした、絵図表現を重視した地図は、その後、明治後期から大正期になって鉄道の開通や利用の普及が進み、風景を視覚的にデフォルメすることで観光地・名所を強調した作風で多くの多色刷り鳥瞰図を作成し「大正広重」とも呼ばれた吉田初三郎（1884-1955）や、観光地や都市を銅版や石版で精緻に描写した鳥瞰図が次々と刊行された（湯原公浩編，2002）。後者については、日本三景・松島や関東地方の諸都市を描いた松井天山（1869?-1946? / 生没年不詳）が挙げられる（中西僚太郎，2000・2002）。さらに、平面図として都市を描いた都市地図は、東京・大阪・京都などの大都市のみならず、明治期になると多くの地方都市において当該地域の書肆、印刷業者によって刊行されてきた。大正期以降になると、木谷佐一・木谷賀らが興した東京交通社による「職業別明細図」として、全国の市街名邑を所在する商店を中心に街並みをもれなく描く地図が刊行され、昭和初期には全国を網羅するに至った（河野敬一，2008）。

もちろん、壬申地券発行に始まる明治期の地籍図作製においても、地域の多くの地図製作者が関わったことが知られている（佐藤甚次郎，1986）。近年では新たな知見も発表されるようになった（古関大樹・西村和洋，2018）が、ここでも課題となるのは、壬申地券や地租改正の地引絵図、地籍編成地籍図などを作製した人々が各地に存在し、検地の技術を踏まえた地籍図の作製であったのか、かれらの経歴や作製技術習得の実態は、地籍図のみの分析からではほとんど知ることはできない。

以上のように、江戸時代後期から明治期前期においては、測量技術の導入と石版・銅版の作図法へと転換するなかで、個々人の地図製作者は江戸時代までの地図製法を継承しつつ、測量や作図を学ぶ場があり、そこで学びつつ近代的な地図作製法へと自らを転換してきたのではないかと想定される。これまでの研究では、迅速測図などの官製地形図、あるいは鳥瞰図などの都市景観や観光地を描いた地図そのものの研究が主であり、とりわけ幕末から明治前期にかけて、個々の地図製作者が自らの地図製作をいかに転換させてきたかを明らかにした実証的研究は、短報以外では、管見の限りでは無いと思われる。

この点を明らかにするために、小野寺・石井・塚本（2016）は横山大観の父酒井捨彦に着

目し、彼が製作した地図の特色の一端を明らかにしたことがある。この研究過程で、明治前期から測量技術者や地図製作者を養成した時習義塾や順天求合社（攻玉社）の存在、ならびに学んだ民間、あるいは官製地図製作者の子弟関係と技術の継承に注目する必要があることが分かった。酒井捨彦のみならず、一族である酒井喜雄、宗孟寛、酒井彪三は、明治期の民間地図製作のキーパーソンである。この点にいち早く着目したのは、横山大観記念館館長を務めた長尾政憲著『横山大観と近親の人々』であった。長尾は横山大観を研究した歴史学者であり、横山大観のみならず酒井家一族の個々人の経歴を詳細な調査に基づいた研究した。多くの学ぶ点があるが、残念ながら酒井家の人々が作製した地図に関しては、主に国立国会図書館所蔵本23舗の紹介に留まっていた。そこで小野寺他（2016）では44舗の現存を確認し、若干の予察的考察を行った。

本研究の目的は、酒井捨彦を中心に、幕末から明治期前期における民間地図製作者が作製した地図、ならびに作図技術の継承と革新を解明しようとするものである。明治期民間地図製作者が作製した地図は、鳥瞰図を除くと、銅板の分県日本図と府県管内図、旅行案内書付図、学校用地図帳の掲載図が多い。捨彦の初期の地図は木板図であったが、やがて石版図や銅板図へ移行しており、近世から近代の地図製作への転換を分析することが可能である。同時に、捨彦の長兄酒井喜雄は東京で「時習義塾」を開塾し、地図製作者を養成した。東京で時習義塾とならび称された地図製作学校は、和算塾「順天堂求合社」であった。数学者で『測量集成』を著した福田理軒（1815-1889）が1871年に順天堂求合社を開き、やがて測量と作図法も指導した（山岡光治，2005）。時習義塾や順天求合社の修了生には、陸軍や海軍で地図製作を担った者もあったであろうし、民間の地図製作者になった者もいたのではないかと想像される。本研究では、この点に関しても資料収集を行うことにした。

2. 本研究における資料収集とその成果

本研究では、①酒井捨彦を中心とした明治期の民間地図製作者が作製した地図の収集、②当時の測量技術や地図製作技術の伝達機関であった時習義塾や順天求合社に関する資料の収集を行った。

- ① 本課題の調査では、国立国会図書館、国立教育政策研究所図書室、神戸市立博物館、福島大学附属図書館、茨城大学図書館のほか、茨城県立歴史館などで原本調査を行った。この中で、主要な収集地図について列記しておく。なお、酒井捨彦作製地図の一覧は、小野寺他 2016 に掲載している。

<国立国会図書館>

○YG913 大日本一統輿地分国図（甲斐国全図、上野国全図、相模国全図、安房国全図、伊豆国全図、常陸国全図、駿河国全図、下野国全図、武蔵国全図、下總国全図、河内和泉摂津国全図、阿波国全図、若狭越前兩國全図、能登国全図、豊後国全図、山城国全図、播磨国全図、出雲国全図、伊豫国全図、加賀国全図、紀伊国全図、長門国全図、淡路国全図、渡嶋国全図、筑前筑後兩國全図、陸中国全図、丹後丹波兩國全図、因幡伯耆兩國全図、周防国全図、備後国全図、丹波国全図、大和国全図、石見隠岐兩國全図、肥後国全図、備中国全図、美作備前兩國全図、琉球諸島全図、後志国全図、肥前国全図、越後佐渡兩國全図、讃岐国全図、肥前国五嶋全図・壹岐国全図・對馬国全図、遠江国全図、日向国全図、安藝国全図、大隅薩摩兩國全図、岩城国全図、羽後国全図）

○Y994J17307 日本新地図

○YG41Z120 明治初期廣嶋縣管内全図（二葉）

○YG913-500 内地旅行獨案内

○YG913-770 東京市坊細見図

○Y994J17404 萬国新地図地理統計表

表1 神戸市立博物館所蔵地図の調査リスト

資料名	編著者	年	技法	法量	頁数	備考
1 新撰万国全図 全	編輯人酒井捨彦 出版人小林喜右衛門	明治10	銅版印彩	50.7×66.1	1鋪	
2 大日本全図	陸軍参謀局木村信卿編次 江江信夫編図	明治10	銅版多色	114.7×121.9	1鋪	
3 大日本全図	監修塚本明毅 校正河田罪・小島尚 製図吉田晋・赤松範静・高橋不二雄・市原正秀	明治14	銅版手彩	162.2×151.2	1鋪	内務省地理局地理課序文
4 府県改正 大日本全図	編輯人酒井捨彦 出版人小林喜右衛門・谷内重興		銅版印彩	100.7×96.1	1鋪	
5 大日本全図	監修塚本明毅 校正河田罪・小島尚 製図吉田晋・赤松範静・高橋不二雄・市原正秀	明治16	銅版手彩	161.7×150.4	1鋪	
6 大日本分国輿地全図 附鉄道線路入第一〜八	著作者宮脇通赫 訂正増補者酒井捨彦	明治22	銅版刷彩	131.0×93.7	8鋪	
7 大日本一統輿地分国図 常陸国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	69.3×42.3	1鋪	
8 大日本一統輿地分国図 下野国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	48.7×38.0	1鋪	
9 大日本一統輿地分国図 上野国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	37.4×48.1	1鋪	
10 大日本一統輿地分国図 駿河国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	37.4×48.1	1鋪	
11 大日本一統輿地分国図 羽前国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	70.8×44.1	1鋪	
12 大日本一統輿地分国図 大和国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	49.6×36.0	1鋪	
13 大日本一統輿地分国図 肥前国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	52.5×52.7	1鋪	
14 大日本一統輿地分国図 日向国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	72.6×50.0	1鋪	
15 大日本一統輿地分国図 遠江国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	47.4×35.0	1鋪	
16 大日本一統輿地分国図 山城国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	48.4×35.8	1鋪	
17 大日本一統輿地分国図 土佐国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	56.3×67.7	1鋪	
18 大日本一統輿地分国図 豊後国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	55.0×51.7	1鋪	
19 大日本一統輿地分国図 肥前国五嶋全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	51.6×38.6	1鋪	
20 大日本一統輿地分国図 肥後国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	59.6×57.0	1鋪	
21 大日本一統輿地分国図 大隅薩摩両国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	63.7×49.9	1鋪	
22 大日本一統輿地分国図 信濃国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	86.2×47.0	1鋪	
23 大日本一統輿地分国図 陸前国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	60.7×51.0	1鋪	
24 大日本一統輿地分国図 磐城国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	64.8×46.2	1鋪	
25 大日本一統輿地分国図 美作備前両国全図	編輯業出版人第四大区神田同朋町十九番地茨城県土族酒井彪三	明治10	銅版手彩	46.5×35.5	1鋪	
26 大日本府県分割図	内務省地理局監修塚本明毅 製図吉田晋・高橋不二雄	明治14	銅版刷彩	35.0×24.0	1冊	
27 久米長順編輯 沖繩縣管内全図	編輯業出版人沖繩縣那覇若狭町百三十一番地寄留茨城県土族久米長順	明治18	銅版刷彩	81.0×47.7	1鋪	
28 九州一覽図 完	時習義塾田中定光著	明治10	石版手際	60.9×47.2	1鋪	
29 改正 陸奥磐城疆界路程全図	水戸小宮山昌秀題 岩城儒官神林富有識 鼎山鍋田三善識	文政11	木版刷彩	57.5×86.0	1鋪	
30 岩城岩代陸前輿地全図 全	常州酒井喜貞識	明治3	銅版刷彩	73.5×151.5	1鋪	
31 安房国輿地全図	高柴三雄誌 西盛旭窓図書	明治2	木版刷彩	36.4×50.8	1鋪	
32 改正銅鑄武蔵国全図 全	酒井捨彦	明治31	銅版手彩	50.8×69.9	1鋪	
33 改正銅鑄上総国全図 全	原図編輯古人高柴三雄 改正人酒井捨彦	明治12	銅版手彩	35.3×49.8	1鋪	
34 千葉県管内実測全図	東京結城正明鑄	明治18	銅版	200.6×139.5	1鋪	
35 長野県管内信濃国全図 全	編輯人東京府平民酒井捨彦 出版人長野県平民西澤喜太郎	明治18	銅版手彩	69.8×48.4	1鋪	
36 下総国輿地全図		江戸時代後期	手書手彩	75.5×105.6	1鋪	
37 下総国輿地全図	高柴三雄誌		木版刷彩	36.6×53.2	1鋪	
38 下総国輿地全図	高柴三雄誌		木版刷彩	37.6×52.3	1鋪	
39 阿波国全図 全	著者茨城県土族松本弘	明治10	銅版刷彩	46.3×66.9	1鋪	
40 阿波国全図 全	著者茨城県土族松本弘	明治10	銅版刷彩	46.3×67.0	1鋪	
41 土佐国図		江戸時代初期	手書手彩	77.8×106.0	1鋪	
42 茨城県下水戸市外改正略図	編輯人東京府平民土浦市松水戸市大字上市寺町八番地寄富	明治23	木版	47.1×64.3	1鋪	
43 便覧水戸市全図	著者茨城県水戸市大字上市鷹匠町六番地小野直喜 著者大字上市黒羽町十二番地近藤茂夫	明治35	銅版刷彩	60.1×86.4	1鋪	
44 太田町略図			石版	39.5×54.4	1鋪	
45 訂正李氏歴代地理沿革図 全	校定訓点熊本県土族林丑人 製図茨城県土族酒井捨彦	明治13	木版	23.4×15.8	1冊	
46 現今改正大日本駅路宝集全	著者兼出版人東京府氏族宗孟寛	明治19	銅版刷彩	20.0×8.5 (全長416.0)	1帖	

2018年8月30日現在

- Y994J17310 萬国新地図
- Y994J17311 萬国新地図
- YG913-351 日雑図（袋）
- YG913-1902 中外輿地図
- YG913-69 再版清韓三国輿地図

<国立教育政策研究所図書室>

- K110.27||40.2 相模国全図・酒井捨彦編・1881
- K120.24||39.7 日本地図：学校用・酒井捨彦著・1891
- K120.24||39.7a 日本地図：学校用・酒井捨彦著・1895
- K120.24||59.1 校用萬国新図・酒井捨彦編・1893
- K220.281||5 校用日本新図：附統計表・酒井捨彦製図・1894
- K120.27||47 東京府管内地図：学校用・酒井捨彦編纂・1891
- K120.27||47a 東京府管内地図：学校用・酒井捨彦製図・1895
- K132.22||9 文部省著小學地理附図 日本之部・東京製図會著・1905-1906
- K132.22||23 文部省著小學地理附図 外国之部・東京製図會著・1905-1906

<神戸市立博物館>

表1は酒井家で地図を製作した酒井喜熙・酒井捨彦・宗孟寛・酒井彪三を中心に、神戸市立博物館所蔵地図の調査リストである。

<茨城県立歴史館>

酒井家本家に関する資料群は、茨城県立歴史館に寄贈された²⁾。水戸徳川家で勘定奉行や町奉行をつとめた家柄である酒井家に伝来したもので、全9点からなる。延宝年間ごろとみられる「水戸城下屋敷割図」の他は江戸時代の資料は家譜、系図のみである。明治時代前期に作成された「東京市内地図」「実測奥羽六県管轄接壤図」がある。ほかに酒井吉雄の墓碑と徳川光国の寿蔵碑（梅里先生碑）の拓本などがある。「実測陸奥六県管轄接壤図」と「東京市内地図」は、酒井喜雄の息子酒井市松の作製と考えられる。

<福島大学附属図書館>

- 291.31 cM S1 茨城県管内町村区画図

② 本課題の調査では茨城県立歴史館のほか、東京都公文書館、順天学園、宮内庁書陵部などで実施し、下記の資料を収集することができた。

<東京都公文書館>

東京都公文書館では、時習義塾の開塾願(M6)、分塾願1(M9)、分塾願2(M10)、酒井喜雄願「時習学舎開業願」(M14)、などの調査・コピーの収集を行った。また、時習義塾の分塾頭であった松浦宏作成の沽券図が多数残っているため、一部（「第一大区一二三小区皇居下神田橋数寄屋橋内ノ部 第一号（四千分の一）（帙書：東京府大区区分図）」ほか4点）などを確認・写真撮影を行う。また、酒井喜雄の息子（？）酒井小次郎の勸工場給仕採用の資料についても確認した。

- 府明Ⅱ明06-041, [D]D038

「松浦宏他 4 名より時習義塾開業願出」

○府明Ⅱ明 0 9 - 0 6 3, [D]D039

「酒井喜雄他 2 名より, 私学分校開業願出」

○府明Ⅱ明 1 0 - 0 7 0, [D]D040

「私学分校開業願ニ付伺 (酒井喜雄, 時習義塾第二分齋清島学舎開業聞届)」

○府明Ⅰ明 1 1 - 0 0 1, [D]D033

「明治 1 1 年 2 月 7 日 勸工場増御雇并給仕採用の伺 勸業課, 庶務課 勸工場給仕へ 東京府士族庄司光鷹 男 庄司重胤 茨城県士族酒井喜雄 男 酒井小次郎 東京府士族中野良六 男 中野欽哉 三重県士族石塚鉄治二男 石塚銀三 静岡県士族小柳津 男 小柳津篤太郎」

○[MF], [D]D043

「酒井喜雄より時習学舎開業届」

さらに, 順天学園渡辺理事長より福田家の末裔 (池上休, 福田素) についての情報をいただき, 東京都公文書館にて東京市測量工手の履歴書等, 公文書を確認した。

○府明Ⅰ明 4 2 - 0 0 2, [D]D037 「命工手 池上休, 太田三郎」

○府明Ⅱ明 4 5 - 0 1 6, [D]D269 「荒川河川測量事業概況 工手池上休」

○府明Ⅱ明 4 5 - 0 1 6, [D]D269

「荒川河川台帳調製に関し東京府と埼玉県との境界調査立会概要 工手池上休」

○府明Ⅰ明 4 3 - 0 0 5, [D]D037

「工手池上休へ荒川河川測量準拠点設置方打合の為埼玉県熊谷町埼玉県河川測量事務所出張を命ず」

○府明Ⅰ明 4 3 - 0 0 5, [D]D037

「荒川河川測量製図場工手池上休より熊谷町にある埼玉県河川測量事務所に出張の処埼玉県庁へ出頭により 1 日帰場延長の件」

○府明Ⅰ明 4 3 - 0 0 5, [D]D037

「工手池上休へ荒川河川測量に関し府県界調査の為埼玉県北足立郡草府口町へ出張を命ず」

○府明Ⅰ明 4 3 - 0 0 5, [D]D037

「工手池上休へ埼玉県浦和町及熊谷町へ出張を命ず」

○府明Ⅰ明 4 3 - 0 0 5, [D]D037

「工手池上休へ江戸川河川台帳更正に付調査の為千葉県へ出張を命ず」

○府明Ⅰ明 4 5 - 0 0 2, [D]D172 「賞与の件 書記 池上休

○府明Ⅰ明 4 2 - 0 0 4, [D]

「明治 4 2 年 4 月 1 2 日達 内務部土木課勤務 工手 池上休」

○府明Ⅰ明 4 2 - 0 0 3, [D]D037 「4 月 1 2 日 工手を命ず 土木課勤務 池上休」

○府明Ⅰ明 3 6 - 0 0 2, [D]D036 「河川測量打合の為埼玉県へ出張 工手 池上休」

○府大 0 8 - 0 0 9, [D]D494

「岡山, 徳島県へ, 河川台帳調整事務視察の為, 出張す多摩川測量事務所工手 池上休」

○[16], [D]D099 「江戸川河川台帳調製打合の為千葉県庁へ出張工手 池上休」

○[16], [D]D099

「命 河川台帳調表に関し調査の為千葉県東葛飾郡へ出張工手 秋山重行・池上休」

○府明Ⅰ明 3 7 - 0 0 2, [D]D036 「8 月 3 1 日 工手を命ず 第二課勤務 福田素」

○府明Ⅰ明 3 7 - 0 0 2, [D]D036

「1 2 月 2 1 日 特別勤勞に因り金円賞与 第二課工手 福田素

○[16], [D]D104

「照会（都市計画事業調査 愛知県・京都府外）工手 大谷保藏・野村友三郎・福田素

○府明 I 明 4 0 - 0 0 3, [D]D037 「福田素」

○府明 I 明 3 8 - 0 0 2, [D]D037

「4月20日 地方官官制改正に依り各部課分掌改定に付現在の官吏吏員雇員はその従事せる事務の属する部課に勤務を命せらる 第一部土木課勤務 工手 福田素」

○府明 I 明 4 0 - 0 0 3, [D]D037

「転免死亡者履歴書 福田素 用済に付本職を免す 東京府工手 明治39年10月8日」

<順天学園>

順天学園では、福田理軒・治軒父子開学、順天中学校・高等学校（以下、順天学園）に時習義塾関係資料を確認した。順天学園は資料の焼失もあり、直接的な時習義塾関係の資料はなかった。しかし、断片的に復元した明治10年からの卒業名簿（非公開）と、明治期の教員採用簿（部分公開・原本）の現存について確認を行った。

○卒業名簿（非公開）

○明治期の教員採用簿（部分公開・原本）

○生徒募集広告（M23）

○『測量新式』福田半編著；花井静訂 萬青堂 1872.10

○『東京近傍独案内之図』福田半編 萬青堂 1879.6.2

<宮内庁書陵部 宮内公文書館>

福田理軒の子、池上休の履歴書から皇室林野局に奉職の経歴が判明したため、宮内公文書館にて公文書調査にて在職記録の確認を行った。

○66787 「新宿植物御苑測量書類 池上手補」

○20823 - 1~4 「進退録 1~4 明治21年」

○20825 - 1~6 「進退録 1~6 明治22年」

○20826 - 1~6 「進退録 1~6 明治23年」

○20827 「進退録明治23~44年」

○20828 - 1~6 「進退録 1~6 明治24年」

○20829 - 1~6 「進退録 1~6 明治25年」

○20830 - 1~6 「進退録 1~6 明治26年」

○20832 - 1~6 「進退録 1~6 明治27年」

○20833 - 1~6 「進退録 1~6 明治28年」

○20834 - 1~6 「進退録 1~6 明治29年」

○20835 - 1~7 「進退録 1~7 明治30年」

○20836 - 1~8 「進退録 1~8 明治31年」

○20838 - 1~7 「進退録 1~7 明治32年」

○20839 - 1~6 「進退録 1~6 明治33年」

○20840 - 1~7 「進退録 1~7 明治34年」

○20841 - 1~6 「進退録 1~6 明治35年」

○20842 - 1~6 「進退録 1~6 明治36年」

○20843 - 1～6「進退録 1～6 明治 37 年」

○20845 - 1～6「進退録 1～6 明治 38 年」

3. 幕末から明治期にかけての酒井家の人々による地図製作

酒井家は水戸家中 200 石程度の中士の家格であり、藩主徳川斉昭のもとで酒井喜熙(1805—1880 年)は地図作製に携わり、幕末には槍奉行となった。酒井喜熙は文化 9 (1812) 年に雨宮端亭が作成した「水戸諸士宅地図」またはその写本を天保元 (1830) 年に写したのが「水戸地図」(公益財団法人徳川ミュージアム所蔵)と考えられる(長尾政憲, 1984)。「水戸地図」は家臣の拝領屋敷を図示した城下絵図であり、手書き彩色図である。天保 4 年, 8 年には「関八州輿地路程全図」を水戸本三丁目の須原屋安次郎から刊行した。さらに、当時海防参与であった徳川斉昭に命じられ、嘉永 5 (1852) 年～安政 2 (1855) 年にかけて「皇国総海岸図」(国立公文書館蔵)を編集し、安政 2 年に斉昭へ献上している。この図を斉昭は将軍家定に献上、攘夷を提言した。本図には海岸地形、港の諸施設、大小の航路と里程などが描かれ、酒井喜熙は江戸幕府所蔵の海岸絵図をもとに水運に詳しい者からの聞き取りによって作製されたという(木下良, 1988)。献上図は江戸城紅葉山文庫に保管されていたが、国立公文書館所蔵となった。この図は明治元 (1868) 年「大日本籌海全図」として刊行され、水運関係者に利用されたといわれる。このほか、酒井喜熙は天保 12 年「会津温泉記」や嘉永元年「塩原温泉記」などの紀行文、また「華厳滝」挿絵も描いた。

酒井喜熙は六男をもうけたが、長男は早逝した。明治維新後、次男の酒井喜雄は東京で測量と製図の技術者を養成する時習義塾を開いた。三男信夫は渋江家の養子となり、陸軍参謀局地図課に勤めた。ところが、明治 14 年、木村信卿課長らの清国への地図売渡し事件(黄遵憲事件)が起こり、信夫は拘引中の刑務所で自決した。四男の孟寛は木下家の養子となり、陸軍参謀本部に勤めながら、時習義塾でも教鞭をとった。しかし、黄遵憲事件の後、大阪に転居し、宗孟寛と改姓し、地図製作を続けた(長尾政憲, 1984)。六男酒井彪三もまた日本分国地図などを作製したことで知られる。

時習義塾開業願にある履歴によると、安政 4 年、酒井捨彦(1847-1907)は 11 歳で兄の酒井喜雄より地理学、製図・測量学を学び、万延元(1860)年、14 歳で弘道館天文地理局において天文学・地理学・製図画学を修業したという(長尾政憲, 1984)。元服後、捨彦は喜員よしかずと称し、17 歳で天狗党の乱に門閥派の諸生として参戦、猪狩公彰の娘寿恵と結婚、21 歳で長男秀麿(後の横山大観)が誕生した。明治維新後は、磯浜、大子、下河合などで過ごしたといわれ、水戸本三丁目の書肆須原屋安次郎の求めに応じ、明治 3 (1870) 年に酒井喜員の名で「校正陸奥分国三州全図」を作成、75 銭で木版刊行した(秋山高志, 1999)。25 歳の時に茨城県官吏となり、さらに新治県官吏となった。新治県官吏の時、伊能家より沿海地図請取により伊能図を実見したとされる(菱山剛秀, 2008)。その後上京し、上野から両国界限を転居しつつ、31 歳で内務省勸農局に勤務、32 歳頃から時習義塾(後に学舎)で製図指導をしていた(長尾政憲, 1984)。明治 14 年の黄遵憲事件で兄渋江信夫が自決すると、松平乗命子爵の地所に一軒家を購入して居住した。松平乗命は明治政府に国絵図を提供したことで知られ、奇妙な縁を感じる。これを契機に、酒井捨彦は製図を主たる生業とする。

酒井捨彦が初めて作製した木版図が「校正陸奥分国三州全図」である。刊記には、西京寺町通松原下ルの勝村治右衛門、大坂心齋橋の河内屋喜兵衛、東京日本橋通一丁目の須原屋茂兵衛、同浅草茅町の須原屋伊八、水戸下町本三丁目の須原屋安次郎、東京日本橋通二丁目の山城屋佐兵衛の書肆、助補として常州久慈郡内田の長山高徳と梶山幹智、太田の佐藤鎌太郎が記されている。この点に着目した寺門寿明氏は長山高徳と梶山幹智について聞き取りを行い、このころ捨彦は常陸太田市下河合の妻方の横山家に身を寄せていたのではないかと考えられると記している(寺門寿明, 1991)。なお、明治 5

年の序文には、仙台、三原、二本松、福島、白河、米沢、若松、岩城平の市街縮図を掲載した経緯が記されている。羽前の米沢が含まれている。本図は明治3年官許を得、捨彦の同年月臘月（12月）の跋文には、以下のように記載されている。

「余近比書肆ノ需ニ応シ奥羽分国ノ図ヲ著スト雖トモ纔ニ道程驛次等ヲ誌スノミ今茲ニ校正シテ岩城岩代陸前ノ全図ヲ製ス陸中陸奥北海道ノ図亦是ニ続ントス夫奥ノ地方境廣大未タ開ケサルノ地多ケレハ村落随テ少シ図面ハ伊能某経緯度実測ニ拠テ製スレハ曲尺六分ヲ以テ道程一里ニ準ス然レドモ地ノ平儉ニヨツテ不同アルコト宜ク斟酌スヘシ神社佛宇古城古戦場産物等ニ至ルマテ誌スト雖トモ素ヨリ浅学ノ成ス処諸君子其僿漏ヲ補正スヘシ」

この跋文によれば、書肆の依頼により奥羽分国ノ図を作製したが、道程や宿駅を記すのみであった。そこで、校訂し、岩城・岩代・陸前の全図を作製し、陸中・陸奥・北海道の図を続けて作製しようとしたが、広大で境が不明で村落も少ないとある。本図の右端枠外には「陸中陸奥羽前羽後渡島刻成嗣出」と刻まれている。伊能某、すなわち伊能忠敬の図は曲尺6分を1里とした実測図であるが、土地の高低を斟酌しなければならぬ。神社仏閣、古城や古戦場、産物などを記さなければいけないが、浅学のため不十分であると記している。実際、こうした表現が本図には図示されており、金華山からは12方位の測量線が朱筆されている。一方で、明治3年の本図の刊行以前に、「奥州分国ノ図」を作製したことが記されているが、その現存を確認することはできなかった。また明治3年時点では、慶応2（1866）年に伊能小図を基にした「官板実測日本地図」が幕府開成所から刊行されていたとはいえ、伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」そのものを見る機会はなかったのではないかと考えられる。ただし、大観の自叙伝には、「伊能忠敬翁の製作に係る多くの測量地図が、酒井家に永く蔵されて」と記載されている（横川毅一郎編、1925）。

酒井捨彦は25歳の時に茨城県官吏となったが、その後すぐに新治県官吏となり、明治6（1873）年8月18日、伊能家より沿海地図請取により伊能図を実見したとされる（菱山剛秀、2008）。明治8年12月には「茨城県管内略図」を金港堂から刊行されたが、現存を確認することができなかった。翌9年1月に「茨城県管轄輿地図」を刊行した。岩田豊樹は、本図を明治期における府県図の初出といわれると記す（岩田豊樹、1977）。常陸国全図と下総国六郡を15万分の1の縮尺で描いた茨城県管内図であり、郡別に色分けされ、小十などと大区小区を記している。大区小区制は、明治5年10月から11年7月の郡区町村編制法の制定までの時期である。したがって、本図は実質2年半の利用であったと考えられる。跋文には茨城県出仕酒井捨彦識とあり、地勢と符合（凡例）が記されている。東京からのルートをわかりやすく図示し、山地をケバで表現した。また、水戸市街之図、土浦市街之図、下妻近郊村落之図が掲載されている。東京銀座彫刻会社石印と記されており、当時の価格で50銭、梅村翠山による石板図であったことがわかる。

酒井捨彦は内務省勸農局に勤めるとともに、四男渋江信夫とともに、時習義塾で製図の指導を行っていた。この時期には、東京市日本橋区の書肆小林喜右衛門より銅板の国図の製作を依頼されている。下総国、上野国、常陸国、下野国、相模国、武蔵国の国図を次々に刊行し、捨彦作製の国図の刊行は明治12年の初版から15年までの4年間に及んだ。明治4年の廃藩置県以後にもかかわらず、依然として旧国単位の国図の需要は高かったようである。国図は明治10年代中頃まで初版が出版されており、また他の地図群と比べて再版発行された国図が多い。明治32年3月の府県制改正まで、国図の需要は高かった。栗田元次の研究によれば、江戸時代の刊行国図は宝永期以降であり、36国で104点に及ぶという（栗田元次、1953）。この中で東日本の国図の刊行が始まるのは、文化期から、銅板は元治

期からである。鶴峯戊申（彦一郎）は嘉永2（1849）年に相模国全図、武蔵国全図、安房国全図、上総国全図、下総国輿地全図を、橋本玉蘭（玉蘭齋、五雲亭貞秀）は同年に常陸国全図、上野国全図、下野国全図を、いずれも菊屋幸三郎ほか10人の書肆から刊行している。これを引き継いだのが小林喜右衛門と考えられ、これら木版の国図を銅版技師の結城正明（1840-1904）と酒井捨彦が継承することになったのではないだろうか。

銅版の国図は山岳をケバ式で表現するなど、地形表現の方法が各図ともに類似している。さらに、各府県内の主要な市街地の地図が附図として描かれている。「常陸国全図」は明治13年7月7日に版權免許を得て刊行、明治22年11月20日に訂正再版印刷、12月6日出版、明治25年5月5日改正印刷出版（定価12銭）、さらに明治29年版と改訂された。

酒井捨彦にとっても、明治14年の黄遵憲事件は大きな転機になったようである。この時期は長男秀麿（後の大観）の学齢期にもあたり、日本図・府県分国図・教育用・旅行案内・歴史地図など多種類の地図を製作している。松平乗命邸の地内、湯島天満宮界隈に居住していた。これまでの発注元である小林喜右衛門との関係は続き、府県分国図、「校用日本新図」、「校用萬国新図」、「新撰萬国全図」、「大日本全図」を刊行、さらに小林喜右衛門・柳原友吉から「新案万国地図」（Johnston alexander keith 原著）「新案日本地図」を刊行した。これらの教科用地図は萬国地誌略の授業で利用され、たとえば「新撰萬国全図」には「世界各国統計表」も付されている。

この時期における酒井捨彦作製日本図は、一枚の図葉・地図帳型・学校教育用に分けられる。商業用と思われる地図もあり、使用用途に合わせて複数の日本図が製作されたと考えられる。山岳登山用ガイドブックとして、『望岳地方覇路之図』（国立国会図書館所蔵）も作製している。さらに小林喜右衛門以外の書肆から中国の歴史地図帳である「李氏歴代地理沿革図」（愛媛大学附属図書館所蔵など）を刊行した。

4. 学校用地図帳に掲載された酒井捨彦の地図

上記のような酒井捨彦の地図製作史のなかで、彼は「東京府管内地図 学校用」、「学校用萬国地図」、「校用日本新図：附統計表」と「校用萬国新図」、「新撰萬国全図」「新案萬国地図」「新案日本地図」という学校用地図帳の作製に多く関わっていることが明らかになった。そこで、本章ではこの点を考察してみたい。

明治期の学校用教科書は、①学制期（1872年～1879年）、②教育令改正期（1880～1885）、③検定教科書期（1886～1902）に大別される。①学制期は自由発行、自由採択制度であり、文部省と官立師範学校、あるいは公立師範学校や府県庁、民間会社で教科書の編集・出版がなされた。この時期の教科書は、欧米の教科書の翻訳・翻刻・翻案が多く、欧米の文化を啓蒙する内容であった。元正院地誌課編『日本地誌提要』は、この時期の代表的な地理の教科書でもある。②教育令改正期に、文部省は編輯局を設置し、標準教科書を作成、地方学務局では教科書取調掛を設置した。教科書制度も1881年に開申（届出）制、1883年には認可（許可）制となった。学年別および発達段階別に編集され、ペスタロッチ主義の開発主義教授法に基づく教科書、あるいは往来物と学制期の翻訳教科書を融合させた教科書も登場した。③文部大臣森有礼は1886年に小学校令を制定し、小学校の教科書検定が定められ、同年5月には教科用図書検定条例、翌年には教科用図書検定規則が定められた。検定教科書は学年別、児童・生徒の発達段階別に編集され、1890年代後半から普及したヘルバルト主義教授法に基づく教科書が登場、教科書の内容が次第に画一化していく。管見では、この時期から学校用地図帳が出版されたようである。たとえば、1891年9月に『学校用東京府管内地図 酒井捨彦編』、1893年10月には『酒井捨彦製図 校用日本新図』が発行された。1903年に小学校令が改正され、教科書の国定制度が

始まり、翌年度からは国定教科書が使用されるようになった。この時期には1904年『文部省著 小学地理附図』、山崎直方著『普通教育日本地図』、帝国書院『地理教科書』などが刊行され、今日の学校用地図帳へと継承されていく。

以上のような教科書ならびに地図帳の内容の変化の中で、1904年の国定教科書の地図帳以降に関しては、中川浩一（1971）、村山朝子・中川浩一（2008）、また西脇保幸（1995）では国定教科書以前の地図帳も含めて外国地名の抽出資料として取り上げた研究例がある。しかし、国定教科書以前の学校用地図帳に掲載された地図そのものに関して、地図史からの考察例がなく、十分な知見を得てはいなかった。そこで、表2には海後宗臣編（1966）の「地理教科書目録三 地図・地球儀」をもとに確認しつつ加除を行い、1886年から1902年までに刊行された学校用地図帳の一覧を示した。現存未確認の2種を含めて47種類にのぼる。ただし、刊行年を記載したものは原本調査を行っているが、現時点では原本未調査のものもあり、未だ完全なリストとはいえない。

表2に示したように、1886年の図書検定から1903年の国定制度の間、すなわち検定教科書期に刊行された学校用地図帳を調べた結果、再版を重ねた主な学校用地図帳をあげると、①酒井捨彦製図・編集で小林（鶴屋）喜右衛門（東京）、榊原（文盛堂）友吉（東京）刊行、②山根丑蔵著で中村芳松（大阪）が石版で刊行、③宗孟寛製図で鈴木常松（大阪）、積善館（大阪、石田・出雲寺）、松本仁吉（謙堂）（大阪）刊行である。このうち、大阪で刊行された②について、田中耕三は小学校の地図帳の統計表の初見は山根秋里の『大日本新地図』であるとし、1895（明治28）年6月の増補第1版26をみると1894（明治27）年12月の時点で訂正18版となっており、この地図帳は当時よく売れていたと指摘している（田中耕三、1992-93）。また中村芳松発行の「教科適用萬国新地図」は共愛学館長の若原興三郎が執筆、「米国エム・エル・リチャード」校閲とある。同様に、東京で刊行された①の酒井捨彦「校用日本新図：附統計表」は少なくとも20版、「校用萬国新図」は少なくとも19版を確認できる。まさに検定教科書期における教科書需要の中で、酒井捨彦は学校用の地図を製作して民間地図製作者としての全盛期を迎えたといえることができよう。それも酒井捨彦製図の学校用地図帳は大ベストセラーであったことが明らかになった。また、捨彦の兄宗孟寛製図の「萬国新地図：教科書用」もまた、好評であったことがわかる。写真1a～dの捨彦「校用萬国新図」は、実際に尋常高等小学校で使用され、写真1c・dの「欧羅巴州」のように、大陸ごとに薄紙に書き写して覚えたようである。実際に教育現場で活用された実態が理解できる。

ところで、世界図はJohnston alexander Keith原著の「新案萬国地図」や前出の「教科適用萬国新地図」にみられるように、外国の地図帳を模し、あるいは欧米人に校閲を仰いで作製されたと想定される。一方、日本図は当時のより正確な図を採用されたと想定される。民間地図製作者が採用できる当時の正確な日本図は、慶応3（1867）年に幕府開成所から刊行された「官板実測日本地図」であろう。もちろん、維新後は伊能図をもとにした1880年「大日本国全図」や1884年編集開始の「輯製二十万分一図」などが入手可能となるが、「官板実測日本地図」は維新後いち早く1870年に大学南校から再刊されており、民間地図製作者や版元でも最も入手が容易であったと考えられる。そこで、試みに図1のように神戸市立博物館所蔵「官板実測日本地図」に描かれた日本の輪郭図形をトレースし、酒井捨彦の学校用地図帳に掲載された日本図の輪郭と重ね合わせてみた。この結果は、必ずしも一致してはいなかった。これらの学校用地図帳に掲載された地図の典拠、たとえば伊能図を基本とした日本図であったのか、それならば公刊されていたいかなる伊能図を基にしたのかを明らかにしなければならない。さらに、なぜ五畿七道の地域区分が採用され続けたのか、地図表現の変化と特色も明らかにする必要があるだろう。もちろん、酒井捨彦以外の同時期の地図製作者が作製した地図についても、同様の分析が必要である。

表2 1886～1902年までに刊行された学校用地図帳（日本図・世界図）

No.	発行年	資料名	編著人名	発行・出版人名	価格	縮尺
1	明治19(1886)年	小学校用 日本地図	村上正武	大阪		
2	明治19(1886)年	小学用地図 日本之部 小学地誌図	長谷川玄龍	大阪		
3	明治19(1886)年	小学用日本地図	下村源治郎	大阪		
4	明治19(1886)年	尋常小学用地図	中田精一	大阪		
5	明治19(1886)年	新撰小学用地図 各地理書摘要日本	石川 正	大阪		
6	明治19(1886)年	新撰小学用地図 各地理書摘要万国	石川 正	大阪		
7	明治22(1889)年	小学用地図	松本仁吉(訳)	大阪		
8	明治22(1889)年	学校用信濃地図	信濃教育会			
9	明治23(1890)年	小学校用新撰日本地図	吉原祐太	岡山		
10	初版:明治24(1891)年 第二版:明治28(1895)年	東京府管内地図 学校用	酒井捨彦	榊原友吉, 土橋友三郎, 牧野准蔵	18 銭	初版:1/20,000 第二版は各図で異なる
11	明治24(1891)年	教科適用大日本帝国新地図	村上鑑太郎・山本明納	東京		
12	明治24(1891)年	學校用萬国地図	酒井捨彦	小林喜右衛門	15 銭	
13	明治24(1891)年	新撰萬国地図(小学校用新撰萬国地図)	吉原祐太	武内教育書房		
14	明治24(1891)年, 明治28(1895)年 ※明治28年版表紙に 第二十版とあり	学校用日本地図	酒井捨彦	初版:小林喜右衛門, 榊原友吉 明治28年版:仙鶴文盛堂 (発行者名は小林喜右衛門, 榊原友吉)	16 銭	
15	明治25(1892)年	教科適用大日本新地図 地理統計表	山根丑蔵(秋里)	中村芳松		
16	明治25(1892)年	日本地図 改訂小学新地誌用	坪井 祥	東京		
17	明治25(1892)年	萬国地図 改訂小学新地誌用	坪井 祥	東京		
18	明治25(1892)年	萬国新地図地理統計表:教科適用	若原與三郎	中村芳松, 前田菊松		
19	明治26(1893)年	萬国新地図	若原与三郎	鐘美堂		
20	明治26(1893)年	教科摘要茨城県地図	本間忠二郎	水戸		
21	明治26(1893)年	小学校用熊本縣管内郡分地図	百瀬彌堅	熊本		
22	明治26(1893)年	小学日本地図 小学日本地理歴史附図	澤邊慶作	名古屋・豊橋		
23	明治26(1893)年	小学日本地理全図	教育学館	東京		
24	明治26(1893)年	萬国新地図 普通学全書第16篇	富山房			
25	初版/第二版:明治26(1893)年, 第三版/第四版:明治27(1894)年/ 明治28(1895)年, 第五版:明治29(1896)年, 第八版:発行年の記載なし (第五版以降の記載内容はすべて同 じだと思われる)	校用日本新図・附統計表	酒井捨彦	小林喜右衛門, 榊原友吉	30 銭	日本地図:1/7,500,000 畿内:1/800,000 北海道:1/3,200,000 その他:1/1,600,000
26	初版~第十九版: 明治26(1893)~明治32(1899)年	校用萬国新図	酒井捨彦	小林喜右衛門, 榊原友吉	25 銭	
27	明治26(1893)年	帝国日本地図:学校用	宗孟寛	鈴木常松		
28	明治27(1894)年, 明治28(1895)年再版, 明治29(1896)年訂正増補	萬国新地図:教科用書: 附地理統計表及各国国勢一覽表	宗孟寛・松本仁吉共著	鈴木常松, 西野宗輔	27年版は 30 銭	
29	明治27(1894)年, 明治29(1896)年, 明治32(1899)年	小学日本地図		金港堂(東京)		
30	明治27(1894)年, 明治29(1896)年, 明治32(1899)年	小学外国地図		金港堂(東京)		
31	明治27(1894)年	日本新地図 日本新地誌用	高城與五郎	富山		
32	明治27(1894)年	日本帝国新地図:教科用書: 各都市街全図・地理統計表	宗孟寛・松本仁吉共著	積善館		
33	明治28(1895)年	新家万国地図	酒井捨彦(立案者元木貞雄)	小林喜右衛門, 榊原友吉		
34	明治28(1895)年	新家日本地図	酒井捨彦	小林喜右衛門, 榊原友吉	20 銭	
35	明治28(1895)年	小学校用下野図	田中保三郎	宇都宮		
36	明治28(1895)年	萬国新地図 萬国新地誌用	高城與五郎	富山		
37	明治29(1896)年	中学教程 日本地理附図	中等学科教授法研究会	東京		
38	明治29(1896)年	地理科補習用 臺灣地図附地誌略	篠崎純吉	大阪		
39	明治29(1896)年	日本地図 改訂小学新地誌用	興風学館	東京		
40	明治29(1896)年	萬国地図 改訂小学新地誌用	興風学館	東京		
41	明治30(1897)年	日本新地図		博文館	25 銭	
42	明治30(1897)年	万国新地図	宗孟寛・松本仁吉共著	鈴木常松		
43	明治32(1899)年, 明治34(1901)年	新定地理 附図小学校用地図		文学社(東京)		
44	明治32(1899)年	中等教育万国地図	佐藤伝蔵			
45	明治34(1901)年	萬国地図:教科適用	井上勝五郎	薫志堂		
46	不明	校用世界新地図	酒井捨彦			
47	不明	小学外国地図	酒井捨彦			

注)資料調査、ならびに海後宗臣編(1966):『日本教科書大系 近代編 17巻』講談社、地理教科書総目録三地図・地球儀により作成

(2018年8月31日現在)



写真 1 a. 酒井捨彦編輯「校用萬國新圖」
茨城大学図書館所蔵

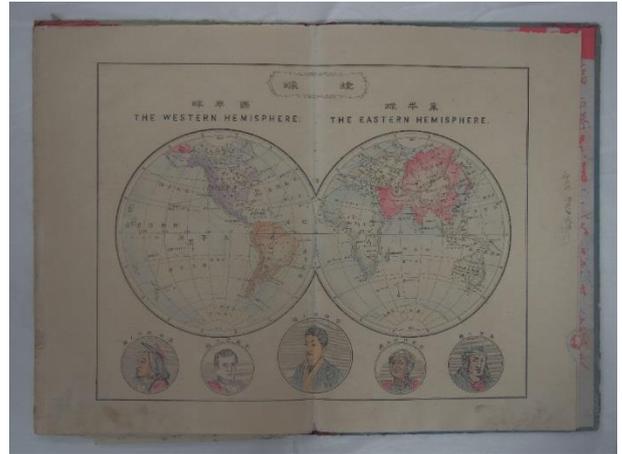


写真 1 b. 世界図



写真 1 c. ヨーロッパ図



写真 1 d. 生徒によるトレース

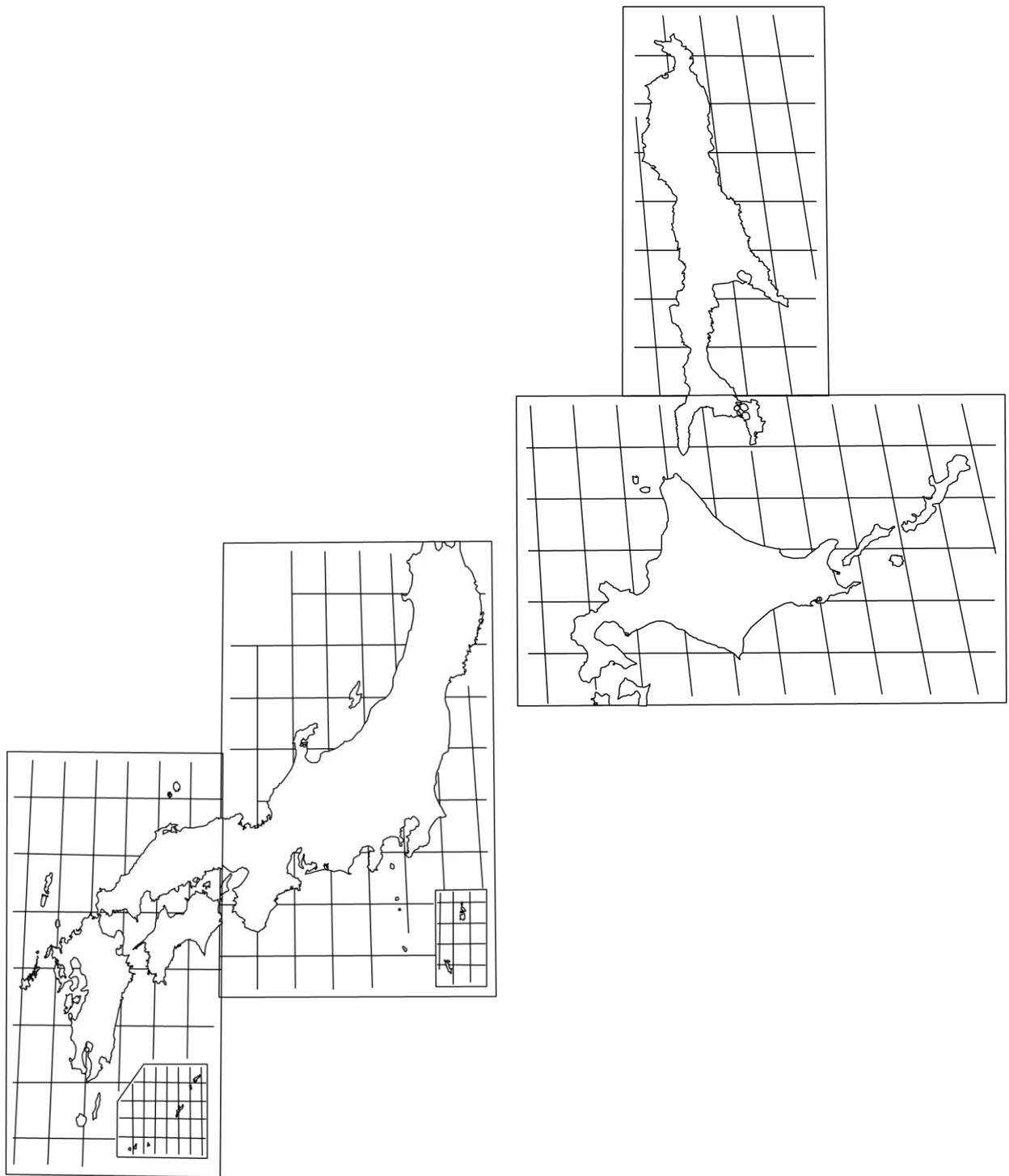


図1 官板実測日本地図の図形トレース

(神戸市立博物館本より永山未沙希作成)

5. おわりに

本研究では、助成によって1年間をかけて資料収集を実施することができた。これらの資料を十分に考察していくのが今後の課題ともいえるが、この中で本研究では特に、酒井捨彦が学校用地図の製作に関わり、その作製した地図を掲載した地図帳の刊行が版を重ねた事実を証明することができた。この成果は歴史地理学会 61 回大会（2018 年 5 月）ならびに茨城地理学会 19 回大会（2018 年 8 月）で口頭発表を行った。

1886年5月には教科用図書検定条例、翌年には教科用図書検定規則が定められた。その後、1903年の小学校令改正、教科書国定制度が始まり、1904年に文部省著『小学地理附図』、山崎直方著『普通教育日本地図』、帝国書院『地理教科書』などが刊行され、今日の学校用地図帳へと継承されていく。1886年の図書検定から1903年の国定制度の間、すなわち検定教科書期に刊行された学校用地図帳を調べた結果、47種類に上ることが分かった。この中には再版を重ねたものもあり、捨彦の「学校用日本地図」は少なくとも20版、「校用萬国新図」は少なくとも19版を確認できる。多くは民間地図製作者の個人名を記載していたが、1905年刊行の文部省著『小学地理附図』では、東京製図会が製図を担当した。すなわち、国定教科書の地図帳からは製図者の個人名が記載されなくなる。換言すれば、酒井捨彦や兄宗孟寛ら幕末に製図技術を修得し、国図などの製作経験を有する民間地図製作者たちが、検定教科書期における学校用地図の製図を担ったということができる。

これらの地図を民間地図製作者が作製するにあたり、日本図は伊能図を基本とした官板実測日本地図や輯製20万分の1によったのか、世界図を含む萬国地図帳はイギリスやアメリカで刊行された地図帳をどの程度もとにしたかなども、今後の検討課題としたい。

一方、酒井捨彦・酒井喜雄・酒井彪三・宗孟寛の地図作製技術の習得、ならびに時習義塾や順天求合社に関わる資料を十分に見出すことはできなかった。ただし、順天求合社を設立した福田理軒・治軒に関する新出資料を見出すことができ、その成果の一部は日本地理学会2018年度秋季学術大会において増山（2018年9月）が口頭発表を行った。

<口頭発表>

小野寺淳・塚本麻文・石井智子・永山未沙希・増山聖子：明治期における学校用地図に掲載された酒井捨彦の地図。歴史地理学会61回大会，秋田大学，2018年5月27日。

小野寺淳・塚本麻文・石井智子・永山未沙希：明治の検定教科書期における学校用地図帳。茨城地理学会19回大会，茨城大学，2018年8月4日。

増山聖子：福田理軒・治軒をめぐる新出資料について。日本地理学会2018年度秋季学術大会，和歌山大学，2018年9月22日。

<注>

- 1) 「地図測量の300人」(exploredoc.com/doc/) のサイトに詳しい。
- 2) 本資料群は茨城県立歴史館学芸課管理のため、展示以外での一般公開はされていない。

<文献>

秋山高志(1999)：『日本書誌学大系 83 近世常陸の出版』青裳堂，147p。

射水市新湊博物館編(2011)：『高樹文庫絵図集 石黒信易・信之・信基・北本栗』射水市新湊博物館編32p。

岩田豊樹(1977)：『古地図の知識100』新人物往来社，p.86

小野寺淳・石井智子・塚本麻文(2016)：酒井捨彦が作製した地図の特色—明治期における一つの民間地図作製史—。五浦論叢(茨城大学)23，53～70。

海後宗臣編(1966)：『日本教科書大系 近代編 第17巻 地理三』講談社，630p。

木下良解説(1988)：『国立公文書館蔵 皇国総海岸図』昭和礼文社複製刊行。

楠善雄(1967)：岩橋教章の生涯と業績—近代に於ける地図図式の先駆者—。月刊測量，10月号，p.4。

熊田司・伊藤純編(2009)：『森琴石と歩く大阪—明治の市内名所案内』東方出版，243p。

栗田元次(1953)：江戸時代刊行の国郡図。歴史地理84-2，69～84。

- 国立公文書館 (1996) 『絵図資料展目録－公文書に見る明治前期の諸相』 国立公文書館, 38 p.
- 河野敬一 (2008) : 大正・昭和前期の職業別明細図 : 「東京交通社」による全国市街図作成プロジェクト. 中西・関戸編『近代日本の視覚的経験 : 絵地図と古写真の世界』 ナカニシヤ出版,
- 古関大樹・西村和洋 (2018) : 市街地券発行地における明治の地籍図の成立過程－大津市街の壬申地券地引絵図と地籍編製地籍地図に注目して－. 日本地理学会 2018 年度秋季学術大会報告.
- 齋藤敏夫 (1977) : 時習義塾の成立と終焉について－水戸酒井家の近代地図教育－ (発表要旨). 地図 15-4, p. 24.
- 佐藤甚次郎 (1986) : 『明治期作成の地籍図』 古今書院, 482 p.
- 清水靖夫 (1965) : 明治期の地図. 天理図書館報ビブリア 32-10, 139～148.
- 武田周一郎 (2017) : 地図史上における岩橋教章と岩橋章山. 総合研究成果報告書『岩橋教章・章山に関する総合的研究』 神奈川県立歴史博物館, 27～38.
- 田中耕三 (1992-93) : 大正・昭和前期の地図教育に関する史的研究. 新地理 40-2, 1～19.
- 寺門寿明 (1991) : 横山大観の茨城時代－「流転の酒井一家」調査ノート. 『特別展 人間横山大観－その人と芸術－』 水戸市立博物館, 1～28.
- 中川浩一 (1971) : 明治期における地図教育の推移 (2). 地図 9-4, 1～7.
- 中西僚太郎 (2000) : 昭和初期の市街鳥瞰図に関する一考察－松井天山の「千葉市街鳥瞰」を事例として. 千葉大学教育学部地理学研究報告 11 号, 27～41.
- 中西僚太郎 (2002) : 鳥瞰図絵師・松井天山の画業と画風. 千葉大学教育学部地理学研究報告 13 号, 11～20.
- 長尾政憲 (1984) : 『横山大観と近親の人々』 鉦鼓洞刊, 184 p.
- 西脇保幸 (1995) : 明治期以降における外国地名の呼称変遷について－主に地図帳を事例として－. 新地理 42-4, 1～12.
- 菱山剛秀 (2008) : 明治時代の伊能大図模写図について. 伊能忠敬研究会発表資料.
- 船杉力修 (2017) : 分県地図の草分け『大日本管轄分地図』について (1) 「島根県管内全図」を中心として. 湊雲 19, 島根大学附属図書館, 4～39.
- 村山朝子・中川浩一 (2008) : 「附図」の系譜 : 国定小学地理地図帳の成立と展開. 茨城大学教育学部紀要. 教育科学 57, 1～27.
- 増山聖子 (2014) : 文書館収蔵明治期調製河川図にみる測量教育の影響. 文書館紀要 (埼玉県立文書館), 27, 119～138.
- 山岡光治 (2005) : 測量・地図歴史散歩 13 最初の測量技術者養成校 順天求社. 月刊測量 6 月号, 24～25.
- 山田志乃布 (2008) : 地域情報の記録と風景画, 中西・関戸編『近代日本の視覚的経験 : 絵地図と古写真の世界』 ナカニシヤ出版, 16-18.
- 山根拓 (2001) : 近代日本の民間地図に関する地理学的考察－北陸地方における都市図の事例から－. 日本地理学会発表要旨集 59, p. 15.
- 湯原公浩編 (2002) 『吉田初三郎のパノラマ地図』 平凡社, 150 p.
- 横川毅一郎編 (1925) : 『大観自叙伝』 中央美術社, p. 4,